

〈献 辞〉

日高第四郎先生の喜寿をお祝いして

川 瀬 謙 一 郎

国際基督教大学教育研究所初代所長として、本研究所の創設に当られた日高先生は、本年喜寿を迎えられました。現在なお大学院教育学研究科の客員教授として御助力を頂いております先生の温顔にふれ、先生の御壮健をお祝い申しあげると共に、私ども所員一同の深い感謝の意をあらわす一端として、本号を日高第四郎先生喜寿記念号としてお捧げいたします。

戦後の日本教育の新しい出発に当って、文部省にあって教育の基本方針の形成、具体化という重大な課題の一端を荷われ、また国際基督教大学の創設に当っては、その中核に加わって大きい成果をお残しになり、その間にあって新生 I C U の任務の一つとしての新しい教育研究の創出をめざす教育研究所、さらにはこの目標の一環としての大学院教育学研究科の開設に当られ、さらに学生指導副学長の重責を荷われるなど、枚挙に暇がないほど多くのものを私どもは先生に負っていることを痛感する次第であります。

1953年に教育研究所が発足して以来、早くも20年の月日が流れました。「初心に帰る」ということばがありますが、I C U 教育研究所の発足当時の課題として何がめざされていたのか、ということは、「I C U 教育研究」の第一号の巻頭に日高先生の筆によって明示されております。今ここでその細部にわたる再録の暇がありませんが、この課題のうちで、何がどの程度まで実現されたのか、と問うてみると、いくつかの成果があげられ、また進行中であると共に、なお多くの残された任務があること、また日高先生のみならず、初期の I C U 教育研究所に参加された諸先生の残された事業を、これをうけついで来た私どもが十分に継承し得ているか、という思いがあることに改めて気付かされる次第です。

また、それと共に他面では、この20年という年月の意味しているものについての思いがあります。恐らくは日本の歴史の中で最も短い間に最も急激な変動が生じたこの期間の初と現在との間で、現代日本の教育が直面している状況がかなり変化しているのではないかと、ということです。高校への進学率が都市部においては90%をはるかに越えるに至っているのみならず、高等教育への進学率も25%に達しようとしていること、これ一つをとってみても、20年前には、これほど早くここまで来るとは、予測はおろか、想像さえできなかったことではないでしょうか。

こう考えて来ますと、当初の計画の中で、今後ひきつづき研究を進めてゆくべきことの他に、そこでは明示されなかったとしても、当初の理念を現在及び予測し得る将来の状況に関わらせて行くならば、当然本研究所の研究計画として取りあげられるべきものがある、といわなくてはなりません。私ども研究所員には、現在この問題について十分に検討する責務がある、と私は思います。私見では、現代における大学教育と、これに関連する様々な問題が、少くとも我国においてかならずしも十分に検討されないままに、新たな対応を迫られる、というところまでに至っている、と思われれます。戦後の日本で、大学教育の中に新しい試みを始めるという任務を荷って出発したICUにおいて、再び新しい角度からの検討が必要とされている現在、ICU教育研究所の役割には重大なものがある、と思います。たとえば、大学制度・大学教育の内容や、入試制度などを、国際的な視野において検討しなおすしごとにはICUは甚だ有利な立場にあるといえましょう。そして、これらの課題を見定め、取り組むことが、日高第四郎先生をはじめとする諸先輩の事業をうけつぐものの使命であり、またその学恩に報いる道であろうと信じるものであります。(ICU教育研究所長)

なお、日高先生が取り組まれたさまざまな困難な問題については、過日、相前後して喜寿を迎えられた現学長篠遠喜人先生、本学社会科学研究所長、大学院行政学研究科長として、本学大学院のもう一つの柱の基を固められた蠟山政道先生のお話と共に、ICU大学院の主催で開かれた喜寿祝賀会の席上での日高先生のお話の筆記が近く別個の形で刊行される予定であることを申しそえてお

きます。

また、献呈の場合、先生のこれまでの御事歴を付するのが常であります。が、本誌第12号においてすでに御紹介済みでありますので、ここでは省略させていただきます。